

台所から持ってきたおせんべいを、ぐりぐりと画面に押しつけてみる。ライネは画面に向かって懸命に手を伸ばしてみせるけど、どんなに頑張ったところで、画面の外のおせんべいを受け取れるわけではない。

「ほら、やっぱり無理だった」

『なにのん気なことぬかしてんだノドカ！ このままじゃおれア飢え死にじゃねえか！ くっそお、この邪魔くせえ窓、思いっきりたいたら割れねえかな』

ライネが内側から画面をノックして物騒なことを言うので、ぼくはあわててそれをやめさせた。

超光速で地球まで飛んできたせいで、ライネはだいぶお腹がへっているらしい。見つけるのを手伝ってくれと頼まれた『師匠』のことを聞こうとしても、ライネは『腹ごしらえが先だ』と言ってゆずらなかつた。

ただライネが今いるのは、ぼくのおんぼろケータイの中。なにか食わせると言われても、どうやったらライネに食べものをわたせるのかさっぱりわからない。このままだと飢え死にも笑いごとじゃすまなくなる。

「ねえ、その場所ほんとなにもないの？」

ぼくが尋ねると、ライネは『ねえなあ』と画面内の真っ白な空間を見わたした。けれどそのすぐあとで、おっ、となにかに気づいたみたいで、

「なにか見つけた？」

『ああ、ここに引き出しみてえなもの……って、なんでえ。中に入ってるんの写真ばっかじゃねえか』

カミナリみたいな金色の髪だけ画面に見せて、ごそごそやっていたライネが、写真っぽいものを投げ捨てる。その後、ケータイの画面が突然まぶしい光でうめつくされた。ぼくはうわっ、と目をつぶった。『な、なんだってんだいったい！』とライネのびっくりした声も聞こえる。

そのうちにまぶたの裏が暗くなったので、ぼくがおそるおそる目を開けてみると、真っ白だったケータイの画面内には、青い海が広がっていた。

「嘘、どうなってるのこれ……」

手前の砂浜にはさあさあと波が打ちよせていた。ライネが砂浜の砂をすくって足もとに落とした。

『……本物だ。もしかしてこれア、さっき捨てた写真のせいか？』

てえことは、とライネは再び画面の下のほうに見えなくなると、べつの写真を手に戻ってきた。するとまた画面がぱあっと光って、海辺の景色が空まで届きそうな高い高いタワーに変わる。

『お——っ、こいつアこの前できていうあれじゃねえか、東京スカイツリー。へえ、師匠はなんでこんなもん建てるんだって怒ってたけど、こうして見るとなかなか見たえがあるなあ』